白石市文化財調査報告書第18集

観音崎遺跡調査報告書

昭和53年3月

白石市教育委員会

白石市文化財調査報告書第18集

観音崎遺跡調査報告書

昭和53年3月

白石市教育委員会

序

白石市内を流れる斎が川流域の古代遺跡は、昭和11年から戦後の昭和23年まで、斎が川改修工事が行われました際、次々と出土する遺物の調査で数多く解明されましたが、今回、昭和52年７月20日から２ヶ月余にわたり、当教育委員会が調査担当者となって発掘調査いたしました郡山観音崎遺跡は、刈田郡の中枢郡衙で、昭和５年刊『日本地理大系奥羽編』の中で、山本桝蔵氏が、「地名の郡山は、この附近が古の郡家の所在地であったことを示しており、文化も早く開け、人口も相当稠密であったと思われ、上代の遺跡の多く存在するのは偶然ではない」と指摘しているとおり、竪穴住居跡30軒を確認するに至りました。

郡山観音崎遺跡は、昭和51年に、その所有者の方々に返還されるまで、県営種畜場として利用され、その後、白石市の管理下にありましたが、宅地造成の開発計画が提示されたことにより、地権者各位と協議を重ねました結果、宮城県教育庁文化財保護課の御指導のもと、国庫補助事業として、遺構確認調査を行ったものであります。

ここにその報告書が完成発刊を見るに至りましたが、関係各位の参考資料として、ご活用賜われば幸と存じます。

おわりに、県文化財保護課の諸先生のご指導に感謝申し上げ、また、発掘調査に御尽力頂いた、白石市文化財保護委員長中橋彰吾、同委員高橋辰男両氏のほか、多数の御協力を頂いた方々に深甚なる謝意を表するところであります。

昭和53年 3 月

白石市教育委員会 教育長　**鈴　木　五　朔**

例　　言

1. 本書は昭和52年度に国庫補助を得て、遺構確認調査を実施した、白石市郡山字観音崎所在、観音崎遺跡の発掘調査概報である。
2. 本書に使用した地図は、白石市の作成したものを使用した。
3. 本書において、土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原：1967）を、土性については国際土壌学会法の粒径区分を参照している。
4. 本書の執筆編集は調査員全員の協議のもとに、中橋彰吾、清野俊太朗が図版の作成と執筆にあたった。
5. 出土遺物は、白石市教育委員会にて保管している。

調査実施要項

遺　跡　名　観音崎遺跡
遺跡記号　ＡＡ
遺跡番号　02322(宮城県遺跡地名表記載番号)
遺跡所在地　白石市郡山字観音崎
調査面積　30,000㎡
発掘面積　1,200㎡
調査期間　昭和52年７月20日～昭和52年９月17日
調査主体者　白石市教育委員会
調査担当者　白石市教育委員会社会教育課
調査指導　宮城県教育庁文化財保護課技術主査　平沢英二郎
〃　〃　技師　加藤道男
〃　〃　〃　高橋守克
〃　〃　〃　佐藤好一
〃　〃　〃　阿部恵
調査員　白石市教育委員会社会教育課主事　清野俊太朗
白石市文化財保護委員長　中橋彰吾
〃　〃　高橋辰男
白石市図書館　遠藤智
調査補助員　東北大学　相原淳一
福島大学　菊地逸夫
調査協力者　土地所有者　渡辺佐男氏ほか21名
白石中学校教諭　大友勝彦
白石市郡山字荒屋敷　遠藤盛勝
株式会社　渋谷組

本調査における指定地内区割の方線測点および現形測量は、株式会社東北地形社の協力を得て行った。

地元協力者　菊地テルヨ、川村あや子、堀米茂、武田幸子、浅野悟、菊地昌房、安藤康雄、加藤朗、福田洋、佐藤正浩、半沢和彦、日下茂男、林尚人、志村進、目黒友規、藤本邦夫、成沢俊博、半沢貞雄、横山隆樹、武田一浩、朝熊敏彦、熊坂裕、長橋和男、宍戸雄二、管野雅彦、日下宗一、佐藤博、高橋芳美、八巻一男、中橋康、青沼洋、横山生次郎、遠藤洋一、日下宗良、川村俊郎、菊地麗子、安藤清泉、遠藤清勝、跡辺和彦、佐竹勝、相原光夫、小室健三、大槻正美、牛沢知明、大槻正浩、芝辻孝行、遠藤浩久、曳地史朗、山田精光、久須見律、佐藤孝夫、川村栄子、矢内ユキ、可野かつ子、赤柄祐子、佐藤リツ子、川村洋子、佐々木可南子、小川淳一（順序不同）

目　　次

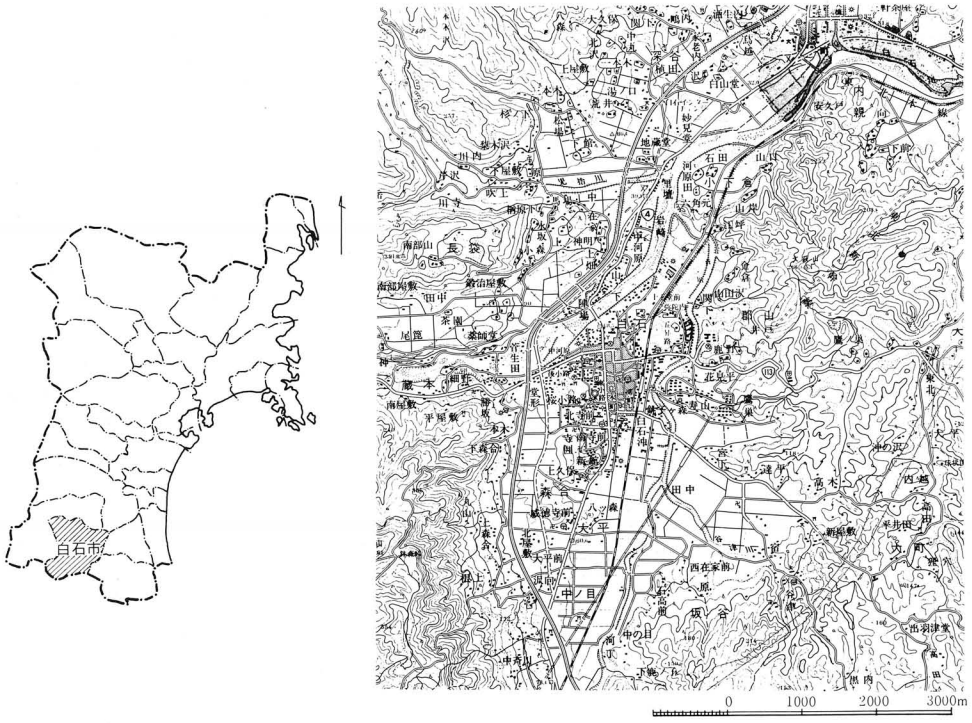
序　文　　白石市教育委員会教育長　鈴木五朔
例　言
調査実施要項
Ⅰ．調査に至る経過…… 1
Ⅱ．遺跡の位置と周辺の環境…… 2
Ⅲ．調査の方法と概要…… 6
Ⅳ．発見された遺構と遺物…… 9
　1．住居跡と出土遺物…… 9
　2．遺構以外から出土した遺物…… 12
Ⅴ．考察…… 16
　1．出土遺物の分類…… 16
　2．出土遺物の組み合せと年代…… 18
　3．遺構の年代…… 20
Ⅵ．まとめ…… 24

Ⅰ．調査にいたる経過

観音崎遺跡のある郡山地区は、白石地方唯一の横穴古墳の存在や、また、識者の間には刈田郡の郡衙の所在が推測されているなど、早くから注目されていた地域であった。白石盆地の北東部に位置し、東方は南北に走る阿武隈山地を背に、西方前面はこの山地直下を北流する斎川によって、広い沖積平地が形成され農耕地帯となっているが、最近はこの地域の一部、観音崎遺跡周辺部の市街化は著しい。

遺跡の存在が知られるようになったのは、昭和11年から昭和23年まで行われた斎川改修工事の際に、流域や河川敷の各所から多量の遺物が発見されているが、本遺跡の近くからも採集されていた。その後、遺跡内の畑地の耕作や小工事などによって、しばしば完形の土師器や須恵器が掘り出されており、時代、遺物の種類、地名、周囲の環境などから、次第に重要な遺跡として認識されるようになった。

この観音崎遺跡は、県営種畜場として使用されていたが、廃止されて以来、白石市の管理下にあったが、昭和51年に旧所有者に返還された。やがて、本遺跡を住宅地とする開発計画が提出されたが、市教委は遺跡の重要性から、所有者と種々協議を重ねた結果、宮城県教育庁文化財保護課の指導を得て、国庫補助事業として遺跡の範囲および遺構の確認調査を行うことになった。



第１図　観音崎遺跡位置図

Ⅱ．遺跡の位置と周辺の環境

観音崎遺跡は、東北本線白石駅の北東約800m、白石市郡山字観音崎に位置し、斎が川西岸のやや微高する自然堤防上に立地している。遺跡の東は斎が川を隔てて、阿武隈山地が河岸までせまっており、西方は平坦な沖積地が斎が川に沿って広がっている。

遺跡の存在する白石盆地は、東は阿武隈山地、西は奥羽山脈から派生する山地との間にある小盆地で、南北約6.5km、東西約2.5km程の規模をもつ。遺跡の東を流れる斎が川は、盆地の南端部の山地中に発し、周辺の支流を集め盆地南半のほぼ中央を北流し、郡山地区で大きくカーブして白石川に合流している。盆地の南半部は、斎が川やその支流によって形成された沖積地で、白石市の主要な水田地帯となっており、北半部は主として市街地となっている。

盆床内の遺跡は、斎が川流域を中心に10数ケ所の遺跡と条里遺構などが確認されている。最近、斎が川地区や大鷹沢地区の圃場整備工事が行われ、この工事に際し各所から遺物が発見されたが、調査にいたらず破壊されてしまった。しかし、この状況は盆床内の遺跡は、斎が川流域だけでなく、南半部の盆床の全域に散在していることを示している。これらの遺跡のうち、東北新幹線関連遺跡として、限られた範囲の調査が行われたのもあるが、ほとんどは未調査で遺跡の性格は明らかにされていない。

これまでに出土した遺物をみると、縄文時代の遺物は極めて少く、大柳前遺跡、谷津川遺跡、大畑遺跡からは弥生式土器が、田中遺跡、梅田遺跡、弥陀内遺跡からは石包丁が発見されており、盆床内は弥生時代以降、斎が川流域を中心に次第に開拓が進み、古墳時代には亀田西遺跡、田中遺跡、北無双作遺跡、観音崎遺跡周辺に集落が形成され、やがて盆地全域が律令体制に組み込まれていったことが、遺跡の分布状態や、条里遺構の残存などから容易に推測される。

盆地の縁辺部についてみると、東部丘陵から盆地内に突出する舌状丘陵には、鷹巣古墳群や亀田古墳群が築造されており、さらに、縁辺部の低丘陵上には、上蟹沢、塔ノ入、車丁、坂谷古墳などの小円墳がみられ、北東部の山地には郡山横穴古墳群のほか数群の横穴が存在している。これらの古墳群は、盆地内の肥沃な農耕地を背景とした豪族たちによって、数世紀もの長い間造営されていったものと考えられる。

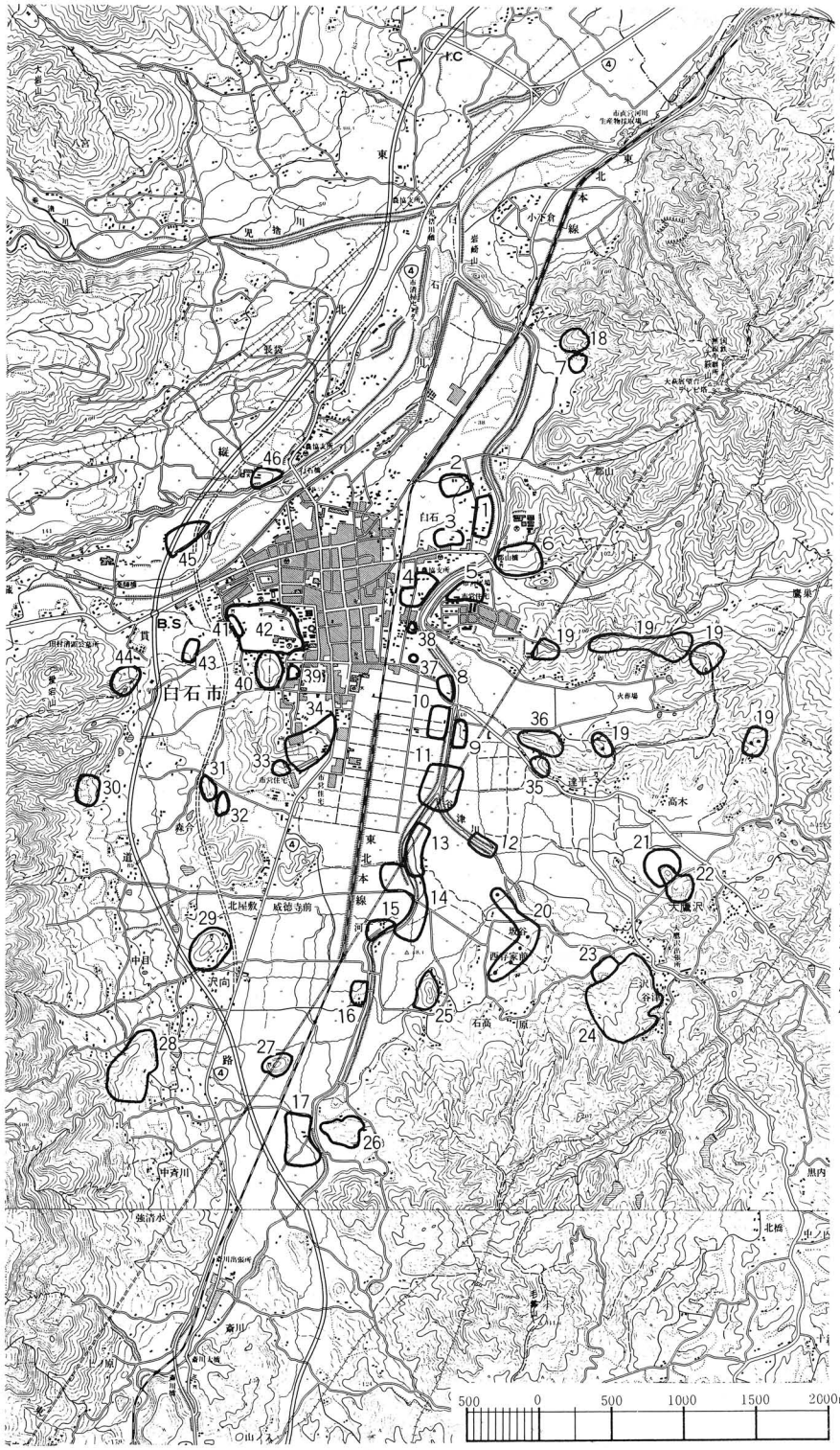
西部山地縁辺部は、縄文時代の遺跡も点在するが、数は少なく、本格的に開けたのは律令時代以後とみられるが、なかでも特殊な存在を示すものに、権現山遺跡、馬塚遺跡、赤城石塚墳、鷲山経塚、神明塚など、経塚、十三塚のような信仰上の遺跡が集中しているのが注目される地域である。

盆地内および縁辺部遺跡地名表

盆　地　内

宮城県遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	立地	地目	海抜高度	時代	出土品
02179	亀田西遺跡	斎川・下河原	散布地	沖積地	水田	50m	古墳・奈良・平安	古式土師器・土師器・須恵器
02138	才原遺跡	大平・才原	〃	〃	畑	47	奈良・平安	土師器
02137	大柳前遺跡	〃・大柳前	〃	〃	宅地・畑	47	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器・須恵器
02136	二丈橋遺跡	〃・二丈橋	〃	〃	水田・畑	47	奈良・平安	土師器・須恵器
02139	西在家山遺跡	〃・西在家山	〃	丘陵麓	畑	60	奈良・平安	土師器・須恵器
02131	原下遺跡	〃・原下	〃	丘陵上	〃	60	奈良・平安	土師器・須恵器
02140	久保沢遺跡	〃・久保沢	〃	丘陵麓	〃	60	奈良・平安	土師器・須恵器
02141	久保沢山遺跡	〃・久保沢山	〃	〃	〃	60	奈良・平安	土師器・須恵器
02142	才の入遺跡	〃・才の入	〃	〃	〃	60	奈良・平安	土師器・須恵器
	新館山西遺跡	〃・新館	〃	丘陵上	〃	53	平安	土師器
	松田遺跡	〃・松田	〃	沖積地	畑・水田	50	縄文	石器
02135	田中遺跡	大鷹沢・田中	包含地	〃	畑	45	弥生・古墳・奈良・平安・中世	弥生土器・石包丁・土師器（引田・ロクロ）・須恵器・中世陶器
02134	江ノ下遺跡	〃・江ノ下	〃	河床	河川敷	44	奈良・平安・中世	土師器・須恵器・岩化米・植物種子
02133	谷津川遺跡	大鷹沢・川崎	〃	沖積地	畑	45	縄文・弥生・奈良・平安・中世	石斧・弥生土器・土師器・須恵器・中世陶器・古銭
02130	五丁目遺跡	〃・五丁目	散布地	〃	〃	50	奈良・平安	土師器・須恵器
02132	白石沖遺跡	白石市・白石沖	〃	〃	〃	45	奈良・平安	土師器・須恵器
	梅田遺跡	〃・梅田	〃	〃	〃	45	弥生	石包丁
02009	北無双作遺跡	〃・北無双作	集落跡	〃	畑・水田	45	古墳・奈良・平安	土師器・須恵器・鉄器・管玉・滑石
02008	銚子ケ盛古墳	〃・銚子ケ盛	古墳	〃	水田中	46	古墳	円墳（箱式石棺？）
02010	銚子ケ盛敷石遺跡	〃・銚子ケ盛43	〃	〃	〃	45	古墳	鉄直刀・鉄釘・敷石あり（古墳？）
02121	本郷遺跡	〃・本郷	散布地	〃	畑・宅地	45	奈良・平安	土師器・須恵器
	大畑遺跡	〃・大畑	〃	〃	〃	45	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器・須恵器
02322	観音崎遺跡	郡山・観音崎	集落跡	〃	畑・草地	45	古墳・奈良・平安	土師器・須恵器・紡錘車
	七屋敷遺跡	〃・七屋敷	散布地	丘陵麓	畑	50	平安	須恵器
	弥陀内遺跡	〃・弥陀内	〃	沖積地	畑・宅地	44	弥生・奈良・平安	石包丁・土師器
	中寺前遺跡	〃・中寺前	〃	平地	水田・宅地	50	平安	須恵器
	益岡西遺跡	〃・益岡	〃	丘陵、麓	畑	50	平安	土師器（ロクロ）
02114	兀山遺跡	〃・兀山	散布地館跡	丘陵上	山林・畑	77	平安・中世	布目瓦・須恵器
東部丘陵								
02143	弥平田遺跡	斎川・弥平田	散布地	丘陵麓	畑	60m	奈良・平安	土師器・須恵器
02006	亀田古墳群	〃・弥平田	古墳	丘陵上	山林	84	古墳	円筒埴輪・前方後円墳1基・円墳4基
	坂谷古墳群	大平・坂谷	〃	丘陵	山林・畑	50	古墳	円墳3基
	車丁古墳	〃・車丁	〃	〃	畑	50	古墳	円墳1基・箱式石棺
	寿山遺跡	鷹巣・寿山	散布地	丘陵上	宅地	60	縄文	石鏃
	和貢遺跡	〃・和貢	〃	丘陵麓	畑・宅地	50	奈良・平安	土師器・須恵器
02122	荒屋敷遺跡	〃・荒屋敷	〃	〃	〃	50	奈良・平安	土師器・須恵器

宮城県遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	立地	地目	海抜高度	時代	出土品
02123	田手屋敷遺跡	鷹巣・田手屋敷	散布地	丘陵麓	畑・宅地	50m	奈良・平安	土師器・須恵器
02124	寺入屋敷遺跡	〃・寺入屋敷	〃	〃	〃	70	奈良・平安	土師器・須恵器
	城内屋敷遺跡	〃・城内屋敷	〃	丘陵上	畑	100	縄文・奈良・平安	縄文土器（中期）・土師器・須恵器
	三島遺跡	大鷹沢・三島	散布地館跡	〃	畑・山林	70	縄文・平安・中世	石器・土師器
02005	鷹巣古墳群	鷹巣・本木山・蛭貿屋敷・堂ノ入山・虎子沢山・寺入屋敷・熊野堂	古墳	〃	〃	70～120	古墳	直刀・鉄鏃・金環・銅釧・勾玉・切子玉・小玉・管玉・埴輪・ワラビ手刀・石製模造品・金銅製刀装具・土師器・須恵器・（現存古墳25基）
02148	上蟹沢古墳	〃・飯塚上蟹沢	〃	丘陵斜面	山林	90	古墳	円墳1基
02146	鹿島山遺跡	郡山・鹿野	散布地館跡	丘陵	畑・社地	85	縄文・奈良・平安・中世	石器・布目瓦・土師器・須恵器
	穴前遺跡	〃・穴前	散布地	沖積地	畑	47	縄文・奈良・平安	縄文土器・石器・土師器・須恵器
02001	郡山横穴古墳群	〃・穴前19	横穴古墳	山腹	山林	50～60	古墳・奈良	勾玉
02003	寺入西横穴古墳群	〃・寺入6	〃	〃	〃	60	古墳・奈良	
02004	寺入東横穴古墳群	〃・寺入7	〃	〃	〃	60～100	古墳・奈良	
02002	金倉横穴古墳群	〃・金倉	〃	〃	〃	90	古墳・奈良	
	黒岩横穴古墳群	鷹巣・黒岩	〃	〃	〃	120	古墳・奈良	
02128	宮下遺跡	大鷹沢・宮下	散布地	丘陵麓	畑	50	奈良・平安	土師器・須恵器
02127	稲荷山遺跡	〃・稲荷山	〃	〃	〃	60	奈良・平安	土師器・須恵器
02126	宮在家遺跡	〃・宮在家	散布地製鉄跡	〃	〃	60	奈良・平安	土師器・須恵器・羽口
	小在家遺跡	〃・小在家	散布地	〃	〃	60	奈良・平安	土師器・須恵器
02129	塔ノ入古墳	〃・塔ノ入	古墳	丘陵斜面	〃	70	古墳	円墳
	塔ノ入遺跡	〃・塔ノ入	散布地	〃	〃	60	奈良・平安	土師器・須恵器
西部山麓								
	幕ノ内遺跡	大平・幕ノ内	散布地竪穴跡	平地	宅地・畑	90	平安・中世	須恵器
	ヨムギ原遺跡	〃・ヨムギ原	散布地	〃	畑	90	縄文	石器
02176	上鹿野前遺跡	〃・上鹿野前	〃	丘陵斜面	〃	60	奈良・平安	土師器・須恵器
02007	権現山遺跡	〃・権現山	土盛塚	丘陵頂部	山林	80	中世	円形小塚5基
02145	内田前遺跡	〃・内田前	散布地	山麓	畑	110	奈良・平安	土師器
02177	神明遺跡	〃・神明	〃	平地	〃	70	縄文・奈良・平安	石器・須恵器
02117	馬ノ塚遺跡	〃・内田前	土盛塚	丘陵上	山林	90	中世	中世陶器（経塚？）
02116	赤城石塚墳	〃・内田前	石塚	〃	〃	90	中世	中世陶器（経塚？）
02118	神明塚墳	〃・鷲山	土盛塚	〃	社地	160	平安	1基
02119	鷲山経塚	〃・鷲山	経塚	〃	山林	120	平安	
	月心院遺跡	〃・山田	散布地寺跡	山麓	畑・墓地	70	平安・近世	土師器
02115	前山遺跡	〃・前山	散布地	丘陵斜面	畑	70	縄文・弥生・奈良・平安	石匙・石鏃・アメリカ型石鏃・土師器・須恵器・布目瓦
02031	一本木遺跡	蔵本・一本木	散布地竪穴跡	山麓	畑	80	縄文・近世	縄文土器（中期）
	屋敷前遺跡	〃・屋敷前	散布地	沖積地	水田	60	縄文	縄文土器（大洞A）
	滝下経塚	〃・滝下	経塚	山麓	畑	70	平安	



1 観音崎遺跡
2 弥陀内 〃
3 大 畑 〃
4 本 郷 〃
5 七屋敷 〃
6 鹿島山 〃
7 穴 前 〃
8 北無双作 〃
9 梅 田 〃
10 白石沖 〃
11 谷津川 〃
12 江ノ下 〃
13 田 中 〃
14 二丈橋 〃
15 大柳前 〃
16 才 原 〃
17 亀田西 〃
18 郡山横穴古墳群
19 鷹巣古墳群
20 坂谷古墳群
21 塔ノ入遺跡
22 塔ノ入古墳
23 五丁目遺跡
24 三沢城跡
25 久保沢山遺跡
26 亀田古墳群
27 飯詰館跡
28 赤 館 跡
29 太平館跡
30 内田前遺跡
31 権現山古墳群
32 上鹿野前遺跡
33 新館西 〃
34 新 館 跡
35 宮下遺跡
36 三島 〃
37 銚子ヶ森古墳
38 銚子ヶ森敷石遺跡
39 中寺前遺跡
40 兀 山 〃
41 益岡西 〃
42 白石城跡
43 屋敷前遺跡
44 一本木 〃
45 菅生田 〃
46 陣場山館跡

第２図　周辺の遺跡

Ⅲ．調査の方法と概要

本遺跡は、斎が川が形成した自然堤防上に立地し、その現状は荒地で、ほぼ平坦であるが、ゆるやかに東（斎が川）へ傾斜している。

また、本遺跡は以前に県営種畜場として利用されていたため、その際の建築物や種々の掘削などでいたるところ攪乱されていた。

今回の調査の目的は、遺構の確認と遺跡の範囲確認調査であるため、基本的にはトレンチ調査を実施した。

調査対象区域に東西30m・南北75m間隔の基準点10箇所を設定し、東南隅を原点Ａとし、以下Ｂ～Ｊとした。また、原点間の南北軸は磁北の方向にあわせて設定した（第３図）。

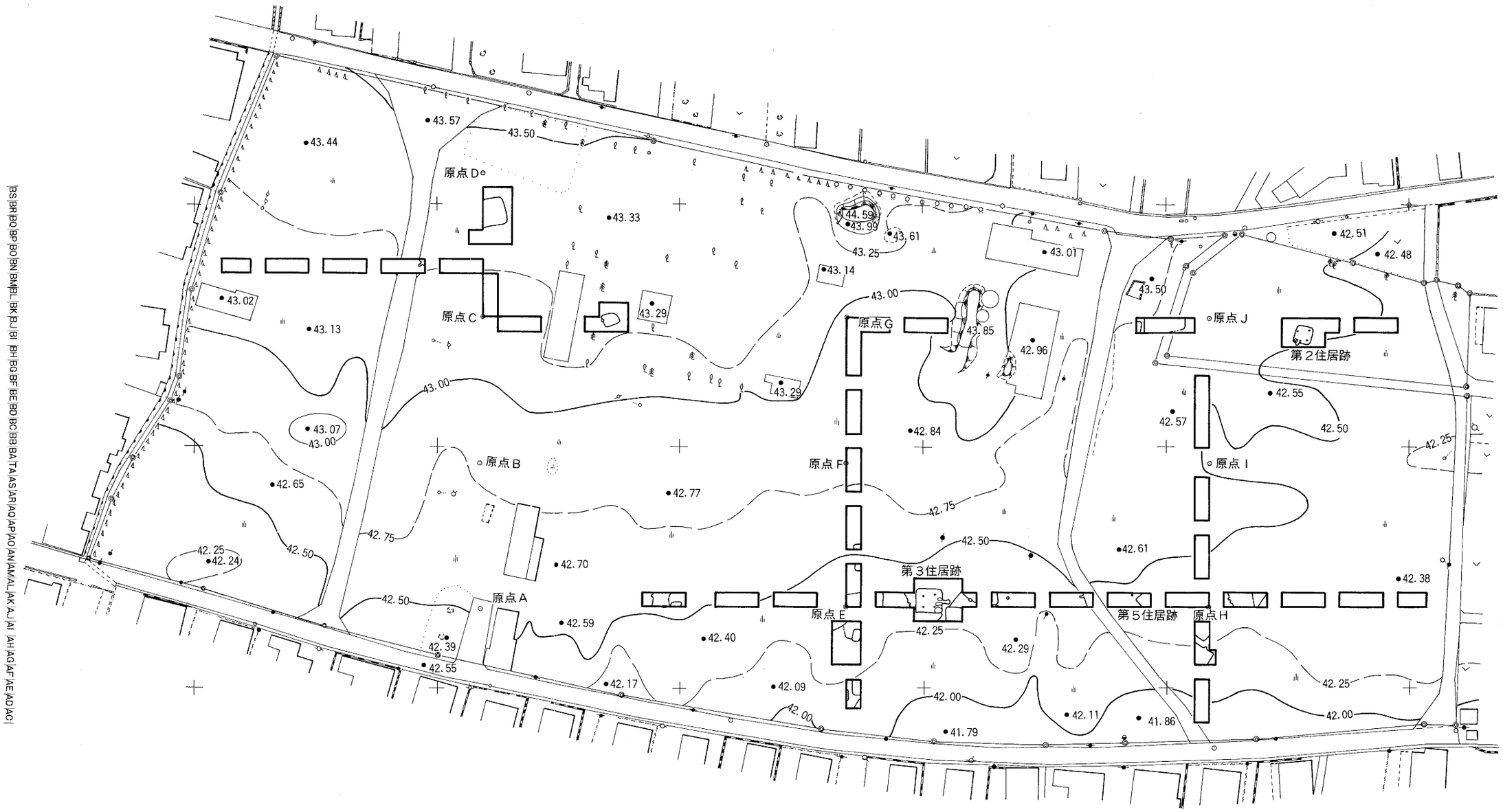
Ｂ、Ｆ、Ｉ原点の東半をＡ区、西半をＢ区とし、基本的には３ｍ×９ｍのグリッドを設定した。今回の調査は前述のように遺構及び範囲確認調査であるが、時代的位置づけを行うため、発見された住居跡には任意に番号を付し、そのうちの２軒（２号住居跡、３号住居跡）については精査を行った。その他の住居跡についてはすべて確認したのみにとどめた。

今回の調査の結果、遺構はＡ区、Ｂ区両地区から発見された。特にＡ区中央付近から北にかけては稠密な広がりが見られる。標高42.00m～42.50mに集中している。

Ｂ区においては、南側と北側で確認されている。標高 43.25ｍ付近と 42.55ｍ～ 42.75ｍ付近で発見された。Ａ区に較べればＢ区においては遺構が少なかった。Ｂ区には後世の建築物の跡などが残っているのでＡ区に較べて調査が困難であったため、Ａ区よりも遺構の確認ができにくかったことも原因の一つである。

遺構の確認面の深さは、ほぼ３０㎝ぐらいであるが、２号住居跡は現表土から約70㎝下で確認された。

遺物はほぼ全域から出土するが、特に遺構付近からは多数出土する。遺物の種類は土師器と須恵器が大部分を占めるが、灰釉陶器や緑釉陶器なども出土している。


原点A
原点B
原点C
原点D
原点E
原点F
原点G
原点H
原点I
原点J
第２住居跡
第３住居跡
第５住居跡
43.57
43.44
43.50
43.33
44.59
43.99
43.61
43.25
43.14
43.01
43.50
42.51
42.48
43.02
43.13
43.29
43.00
43.85
42.96
42.55
42.57
42.50
43.07
43.00
42.84
42.25
42.65
42.77
42.75
42.50
42.61
42.38
42.25
42.24
42.50
42.70
42.59
42.40
42.39
42.55
42.17
42.09
42.25
42.29
42.00
42.00
42.11
41.86
41.79
42.00
0
10
20
30
40
50m

第3図　グ　リ　ッ　ド　配　置　図

Ⅳ．発見された遺構と遺物

１．住居跡と出土遺物

ほぼ平坦な自然堤防上に古代の竪穴住居跡が多数発見された。今回の調査は遺構および範囲確認調査で竪穴住居跡30軒を確認したが、調査日程の都合上、完掘したのは２軒である。その他の住居跡については、平面プランの確認のみを行うにとどめた。これらの遺構からは古墳時代後期～平安時代の遺物が出土しており、観音崎遺跡が長い期間にわたって形成された古代の集落跡であることを示している。

第２住居跡（第４図）

〔**重複・増改築**〕認められない。

〔**平面形・方向**〕長軸3.50m・短軸3.30mの規模をもつ正方形の住居跡で長軸方向は東南東―西北西である。

〔**床面**〕ほぼ水平であるが、礫層を掘り込んでいるため、床面一帯に礫がみられる。

〔**柱穴**〕床面から４個のピットが検出されている。ピットの配列状態からP_1とP_2が柱穴と考えられる。しかし、これと組み合う他の柱穴は検出されなかった。

〔**周溝**〕検出されなかった。

〔**カマド**〕東壁南よりに付設されている。燃焼部は幅32cm、長さ30cmの規模で構築されている。燃焼部底面は焼けて赤くなっている。煙道部底面及び側壁は焼けていない。

〔**貯蔵穴**〕住居跡東南隅に位置しているP_3が貯蔵穴と考えられる。長軸60cm・短軸50cm・深さ20cmの規模を持ち、長軸方向は住居方向と一致する。堆積土は大別して２層に分けられるが、混入物の違いなどから３層に細別される。基本的には水平に近い層の堆積である。

〔**出土遺物**〕本住居に伴うと考えられる遺物には、カマド側壁に使用していた土器、及び貯蔵穴内、住居に伴うピット内の土器などがある。

土師器

坏（第７図２）　器形は平底で、体部が直線的に外傾し、口縁部がやや外反する。内外面剝離のため、調整は不明である。

甕（第７図１・３）　製作の際、いずれもロクロを使用しないものである。最大径が体部にあるもの（１）と口縁部にあるもの（３）とがある。

(1)は、体部がほとんど欠損している。頸部から口縁部にかけては、するどくくびれている。口縁部端は外へ軽くつまみ出されている。器面調整は、内外面ともにヨコナデが施されている。

(3)は、底部を欠いている。体部はやや丸味をもって立ちあがり、口縁部は外反する。器面調整は、口縁部内外面がヨコナデ、体部外面には刷毛目が施されている。体部内面にはヘラナデ

がみられる。

甕（第７図４）　体部下半を欠いている。体部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に立ちあがる。調整は、口縁部内外面ともにヨコナデが施されている。体部外面は刷毛目で、内面はヘラナデが施されている。

第３住居跡（第５図）

〔**重複・増改築**〕第４住居跡と重複している。第４住居跡廃絶後に構築されている。

〔**平面形・方向**〕長軸4.80m・短軸4.60mの規模をもち、長軸方向は北―南である。平面形は正方形である。

〔**床面**〕砂質の地山をたたきしめたような固い床である。床面中央では当時の生活面と考えられる薄い層が確認された。床面はほぼ水平である。

〔**柱穴**〕床面から６個のピットが検出されている。対角線上に位置するP_1・P_2・P_4・P_6が柱穴と考えられる。

〔**周溝**〕検出されなかった。

〔**カマド**〕北壁中央に付設されている。燃焼部は幅60cm・長さ80cmの規模をもち側壁は黄色粘土で構築されている。燃焼部底面には50×40cmの範囲で焼け面が認められた。燃焼部から煙道部にかけて一部、天井が残存していた。

〔**貯蔵穴**〕北東隅に認められるP_3が貯蔵穴と考えられる。長軸120cm・短軸100cmほどで、床面からの深さ16cmの楕円形である。

〔**その他の施設**〕床面中央に平坦な面をもつ石が出土している。若干床面下に埋っているが、埋設の際の掘り方は検出されなかった。しかし、「台石」としての決め手には欠けるが、何らかの施設として使用された可能性は残されている。

〔**出土遺物**〕本住居に伴うと考えられる遺物には、床面の土器、カマド床面の土器及び貯蔵穴内出土の土器などがある。

土師器

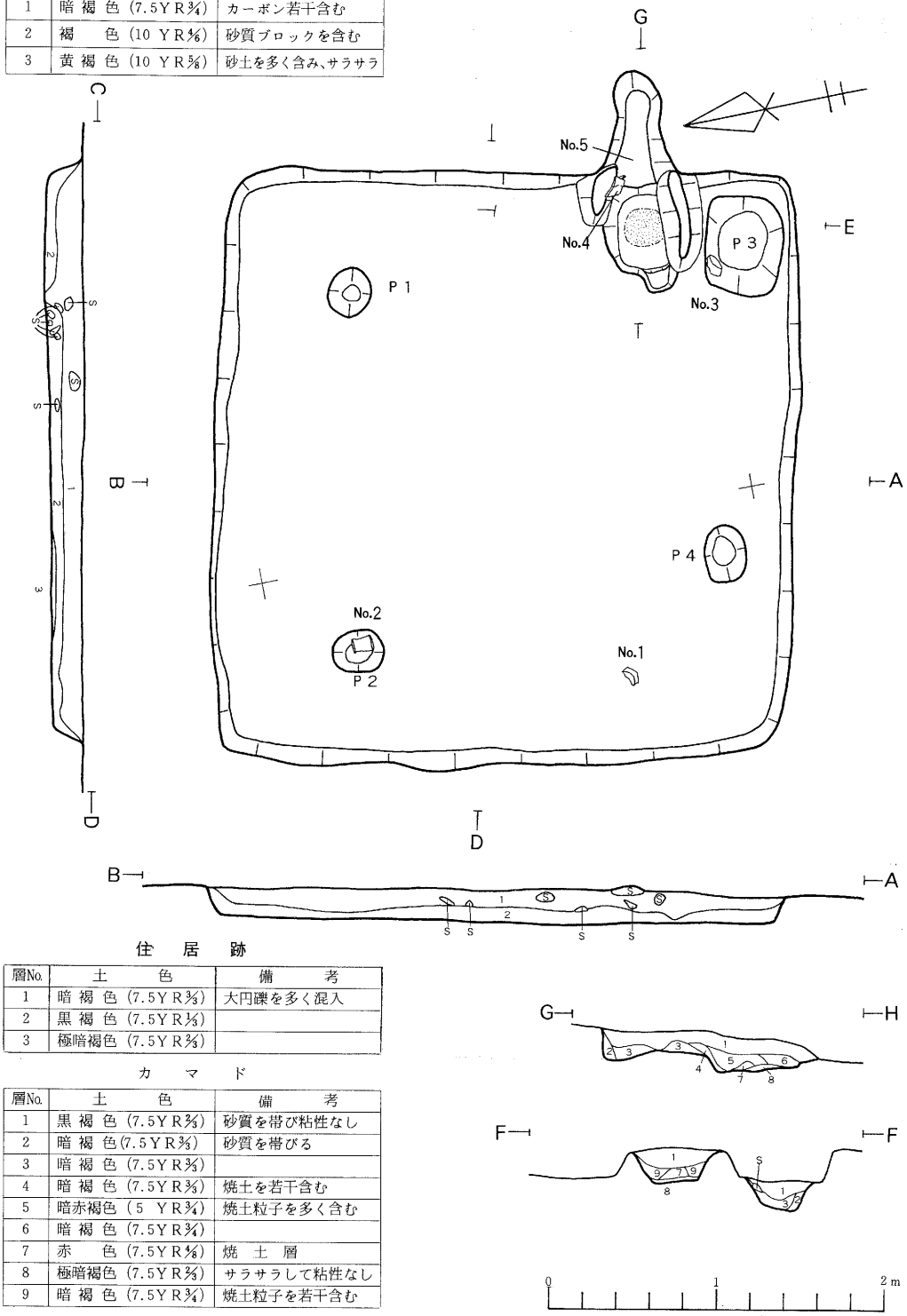
坏（第８図２・３）　いずれも製作に際しロクロを使用し、内面にヘラミガキ、黒色処理が加えられている。底部の切り離しは回転糸切り技法である。体部が直線的に外傾し、口縁部で外反するもの（２）と、体部が丸味をおびて外傾し口縁部が内弯ぎみのもの（３）とがある。再調整は体部下端に回転ヘラケズリが施されているもの（２）と、ないもの（３）がある。

甕（第８図１）　製作に際しロクロを使用している。体部は直線的に立ちあがり、頸部から口縁部にかけては、するどくくびれている。口縁部端は外へ軽くつまみ出されている。内外面にロクロ調整が施されている。

小型手捏ね土器（第８図４）　体部はやや内傾ぎみに立ちあがり、口縁部は内弯している。

貯　蔵　穴

層No.	土　　色	備　　考
1	暗 褐 色 (7.5YR3/4)	カーボン若干含む
2	褐　　色 (10 YR5/6)	砂質ブロックを含む
3	黄 褐 色 (10 YR5/8)	砂土を多く含み、サラサラ



住　居　跡

層No.	土　　色	備　　考
1	暗 褐 色 (7.5YR3/3)	大円礫を多く混入
2	黒 褐 色 (7.5YR1/3)	
3	極暗褐色 (7.5YR2/3)	

カ　マ　ド

層No.	土　　色	備　　考
1	黒 褐 色 (7.5YR2/3)	砂質を帯び粘性なし
2	暗 褐 色 (7.5YR3/3)	砂質を帯びる
3	暗 褐 色 (7.5YR3/3)	
4	暗 褐 色 (7.5YR3/3)	焼土を若干含む
5	暗赤褐色 (5 YR3/4)	焼土粒子を多く含む
6	暗 褐 色 (7.5YR3/4)	
7	赤　　色 (7.5YR4/6)	焼 土 層
8	極暗褐色 (7.5YR2/3)	サラサラして粘性なし
9	暗 褐 色 (7.5YR3/4)	焼土粒子を若干含む

第4図　第 2 住　居　跡

土器内外面はいずれもおさえが施されている。

灰釉陶器壺（第９図５）　製作に際しロクロを使用しているが、体部上半を欠いている。底部の切り離しは不明であるが、高台付である。底部内面にはおさえが施されている。

第５住居跡（第６図）

Ａ区北側において検出された。今回精査はしなかったが、露出した遺物は実測後、取り上げた。

出土遺物は、３個体発見されている。土師器の甕２個体、甑１個体である。いずれも床面から３段に重なって出土している。

甕（第10図４・５）　いずれも製作に際しロクロを使用していない。また、どちらも最大径は体部にあり、頸部には段が認められる。口縁部は外傾し、体部は球形である。口縁部内外面にはヨコナデ、体部外面には全体に刷毛目が施されている。体部内面はヨコナデのもの（　４　）と刷毛目のもの（　５　）がある。底部内面はヘラナデが施されていて、土器製作に際しての粘土積上痕跡が明瞭に認められる（　４　）。（　５　）は体部下端を欠いている。

甑（第10図２）　無底に近い単孔式のものである。体部から口縁部まで外反ぎみにやや丸味をもって立ちあがる。口縁部内外面はヨコナデが施され、体部外面は刷毛目、内面はヘラナデが施されている。底部近くは内外面ともおさえが施されている。

２．遺構以外から出土した遺物

イ、遺構内堆積土出土遺物

第３住居跡堆積土出土遺物（第８図・第９図）

土師器

坏（第８図５・６、第９図１）　いずれも製作に際しロクロを使用している。器形はいずれも内弯ぎみに立ちあがる。第８図５、第９図１は底部切り離しが回転糸切り技法で、体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ・黒色処理が加えられている。第８図６は、内外面ともヘラミガキ・黒色処理が施されて底部の切り離しは不明であり、底部に「丈」の字がヘラ書きされている。

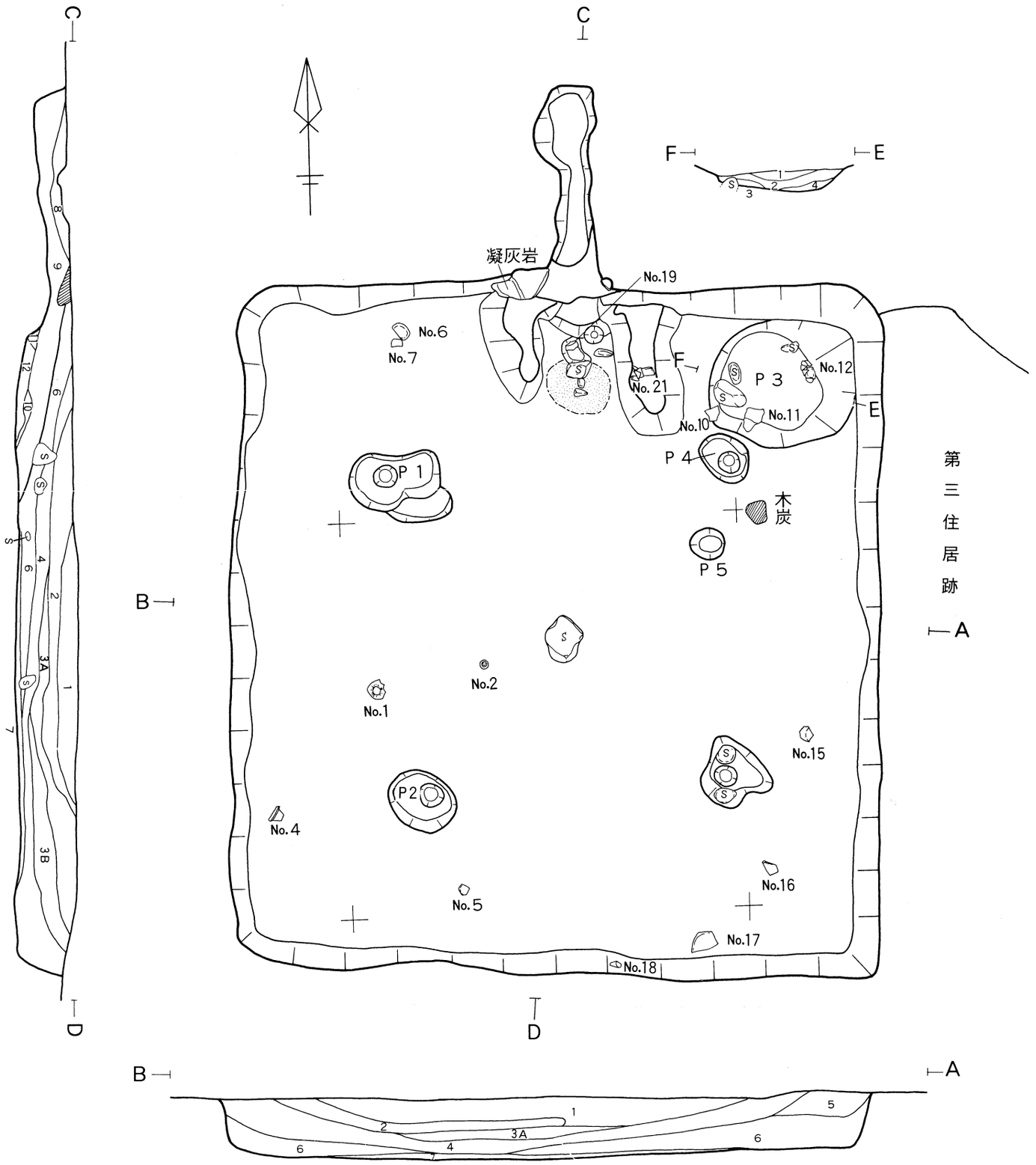
須恵器

坏（第８図７・８、第９図２・３）　いずれも製作に際しロクロを使用している。底部切り離しは、回転糸切りのもの（７・８）と底部を欠いて不明のもの（２・３）がある。再調整はいずれも施されていない。

甕（第９図６）　体部のほとんどを欠いている。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部はわずかに外傾する。口縁部中央に自然釉がみられる。

貯　蔵　穴

層No.	土　色	備　考
1	極暗褐色（7.5YR2/3）	カーボン・白色微粒を多く含む
2	暗 褐 色（7.5YR3/4）	カーボン・焼土を若干含む
3	〃　（7.5YR3/3）	〃
4	褐　色（10 YR4/6）	カーボンを若干含む



住　居　跡

層No.	土　色	備　考
1	黒 褐 色（7.5YR3/2）	遺物・木炭を含む
2	極暗褐色（7.5YR3/3）	
3A	黒 褐 色（7.5YR3/2）	木炭を含む
3B	〃　（7.5YR3/2）	
4	〃　（7.5YR3/4）	
5	〃　〃	
6	暗 褐 色（7.5YR3/3）	
7	極暗褐色（7.5YR2/3）	生活面？

カ　マ　ド

層No.	土　色	備　考
8	黒 褐 色（7.5YR3/2）	木炭若干含む
9	黒　色（7.5YR2/1）	木炭含む
10	極暗褐色（7.5YR2/3）	焼土を含む
11	〃　〃	
12	黒 褐 色（7.5YR3/2）	焼土木炭を含む

0　1　2 m

第5図　第　3　住　居　跡

灰釉陶器（第９図４）　高台付の壺で体部の一部に釉がみられる。底部調整は不明である。

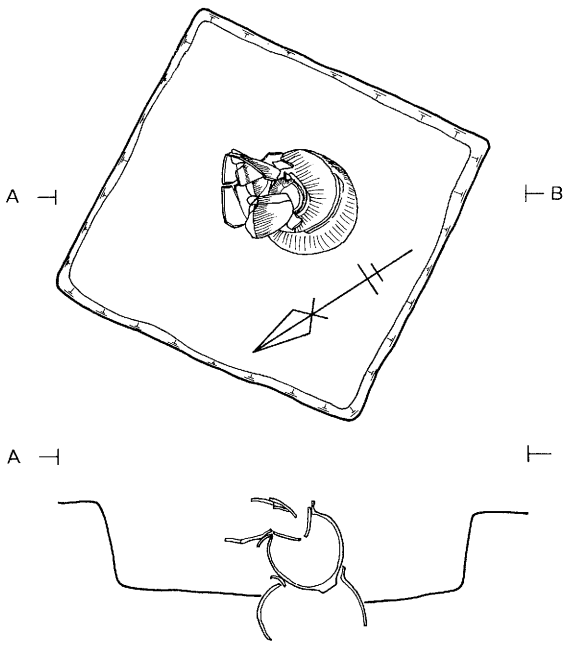
ロ、遺構以外堆積土出土遺物（第７図・第９図・第10図・第11図）

土師器

坏（第11図４・５）　いずれも底部を欠いている。内面が黒色処理されているもの（ ５ ）と、そうでないもの（４）がある。また、（４）は口縁部内外面にヨコナデが施され、体部下半に手持ちヘラケズリが施されている。体部内面の調整は不明である。（ ５ ）は口縁部内外面ともヨコナデが施され、体部外面はヘラケズリが施されている。また、体部内面はヘラミガキが施されている。口縁部と体部を区別する段が認められる。いずれも口縁部は直立する。

甕（第10図３、第11図１・７）　体部下半を欠いているが、器形は長胴を呈するもの（３・７）と球形を呈するもの（ １ ）とがある。最大径の位置が口縁部にあるもの（ ３・７ ）と体部にあるもの（ １ ）とがある。また、頸部に段が認められるもの（ １・７ ）と認められないもの（３）とがある。口縁部はいずれも外反する。調整は口縁部内外面ともヨコナデのもの（ １ ）と内面の一部にヘラナデが施されているもの（ ３・７ ）とがある。体部外面はいずれも刷毛目が施されている。体部内面はヨコナデのもの（ ３ ）とヘラナデのもの（ １・７ ）がある。

甑（第７図６）　口縁部を欠いている。無底の単孔式のものである。体部外面はすべて刷毛目が施され、内面は上半がヘラナデ、下半がヘラナデの後ヘラミガキが施されている。



第６図　第５住居跡遺物出土状態　0　50cm

高坏（第11図２・３）　いずれも坏部をほとんど欠いている。坏部内面は黒色処理されている。脚部に透しのあるもの（ ３ ）とないもの（ ２ ）とがある。（ ２ ）の脚部外面上半はヘラケズリ、下半はヨコナデが施されている。内面は上半がヘラケズリ、下半はヨコナデが施されている。（ ３ ）の脚部外面上半はヘラケズリ、下半はヨコナデが施されている。内面はヘラケズリであるが一部ヨコナデも認められる。

手捏ね土器（第10図６）　器台に似た器形である。内面は黒色処理され、ヘラミガキも施されている。体部外面は一部ヘラミガキが施されている。底部中央に丸い凹みが認められる。

須恵器

高台付坏（第７図５・第11図６）　いずれもロクロを使用している。器形はどちらも内弯ぎみに立ちあがる。底部切り離しは回転ヘラ切り（ ６ ）と不明のもの（ ５ ）がある。再調整は体部下端から底部に回転ヘラケズリの施されるもの（ ５ ）とないもの（ ６ ）がある。

蓋（第10図１）　ロクロを使用している。再調整は体部上半に回転ヘラケズリが施されている。

土製品（第９図７）　土製の紡錘車である。土器外面は一面にていねいなミガキが施されている。

Ⅴ．考　　察

１．出土遺物の分類

今回の調査で出土した遺物には、土師器、須恵器、土製品などがある。ここでは比較的分類の可能な坏、甕について分類を行うことにする。

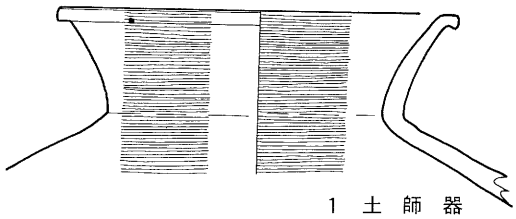
土師器

坏　坏はロクロ使用の有無、器形および調整などによって次のように分類される。

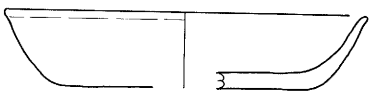
坏Ａ類―ロクロを使用せず体部に段のないものである。口縁部は直立し外面の体部との境にわずかな陵がつく。底部は丸底である。器面調整は体部外面がヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

坏Ｂ類―ロクロを使用せず体部に段のつくものである。口縁部はわずかに外傾し、丸底である。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面はヘラケズリが施されている。

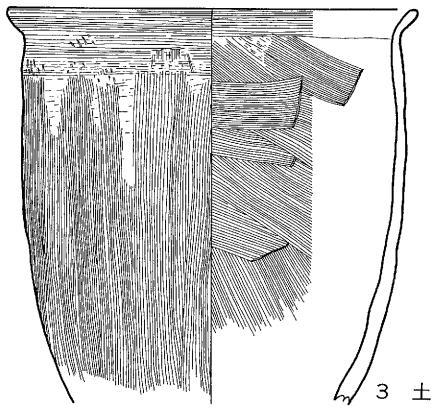
坏Ｃ類―ロクロを使用し、底部の切り離しが回転糸切り技法によるものである。内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理が加えられている。再調整の有無によって２つに細分される。CI類は体部下端に再調整がみられるものであり、回転ヘラケズリによ



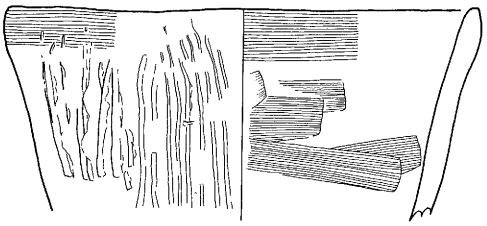
1 土 師 器



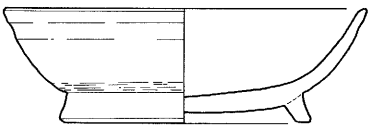
2 土 師 器



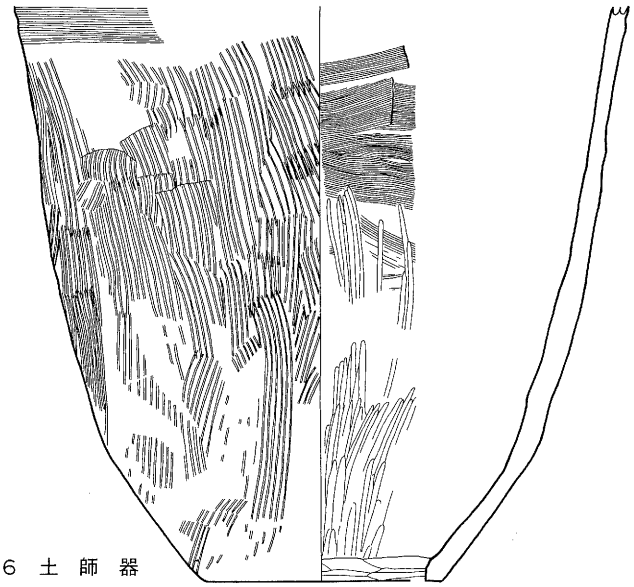
3 土 師 器



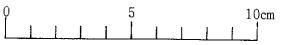
4 土 師 器



5 須 恵 器



6 土 師 器



	器種	区名	調整 口縁部 内面	調整 口縁部 内面	調整 体部上半 内面	調整 体部上半 外面	調整 体部下半 内面	調整 体部下半 外面	調整 底部 内面	調整 底部 下面	黒色処理	器高 cm	口縁部cm	写真番号	分類記号
1	甕	2住カマド内No. 5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ						7.5	16.0		B_2
2	坏	2住 No. 3		表面剝離のため不明								3.5	14.5		
3	甕	2住カマド内No. 4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	八ヶ月後のヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ				15.7	16.4	22	A_2
4	甑	2住 No. 2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ハケメ						8.2	19.0		
5	高台付坏	A K 48 − 2	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラケズリ	ロクロ痕	回転ヘラケズリ		4.6	14.5		B
6	甑	A G 70 − 3		ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ	ヘラナデ→ヘラミガキ	ハケメ				22.9		16	

第7図　2号住居跡出土遺物とその他の遺物

るもの(CIa)と手持ちヘラケズリによるもの(CIb) とがある。CII類は再調整のみられないものである。

坏D類—ロクロを使用し、底部の切り離しは再調整のため不明なものである。内外面ともにヘラミガキ、黒色処理が加えられている。

甕 甕はロクロの有無および最大径の位置によって次のように分類される。

甕A類—ロクロを使用せず、最大径が口縁部に位置するものである。器高が口径より大きい長胴形であり、さらに頸部に段のつくもの(A_1)とつかないもの(A_2)に分かれる。器面調整は体部がすべて刷毛目である。内面はヨコナデのものとヘラナデのものとがある。

甕B類—ロクロを使用せず、最大径が体部に位置するものである。器高が口径より大きい球形のものであり、さらに頸部に段のつくもの(B_1)とつかないもの(B_2)に分かれる。器面調整はすべて体部外面が刷毛目である。内面はヘラナデである。

甕C類—ロクロを使用したものである。

須恵器

坏—すべて底部の切り離しが回転糸切り技法によるものである。再調整はみられない。

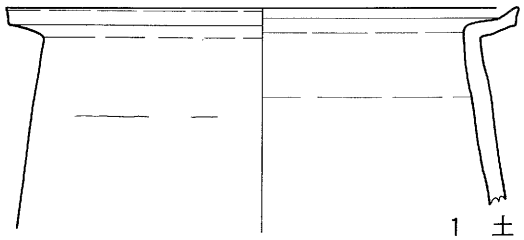
高台付坏—底部の切り離しがヘラ切りによるもの（A類）と体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが加えられて切り離しの不明なもの（B類）とがある。

2．出土遺物の組み合わせと年代

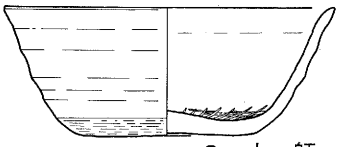
今回の調査で精査した住居跡は2軒で出土遺物も少ないので、各住居跡間に共通する組み合わせを行うことは不可能である。したがって、比較的出土遺物の多い第3住居跡を中心に組み合わせを試みることにする。土師器坏はロクロを使用し、底部切り離しが回転糸切り技法で再調整のあるものとないものとがある(坏C類)。また、同じくロクロを使用して底部糸切り離し技法が不明で再調整のあるものも出土している（坏D類)。一方、甕はロクロを使用しているもの（甕C類）が出土している。以上により、坏C類・坏D類及び甕C類は共伴関係にあると考えられる。したがって本住居跡出土遺物は、ロクロを使用していることから表杉ノ入式期に比定される。

第2住居跡出土遺物は、年代を推定できる土器が無いため時期は不明である。

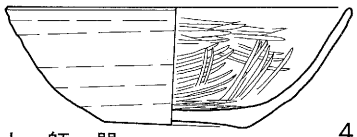
第5住居跡出土の2個体の甕は、その形態から栗囲式期に比定される。



1 土師器

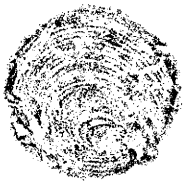


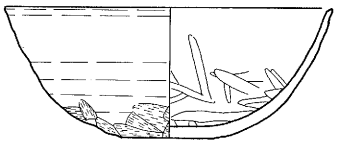
2 土師器



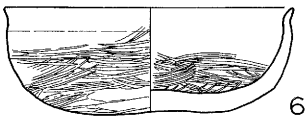
3 土師器

4 土師器



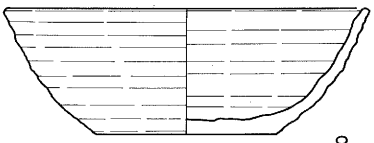


5 土師器



6 土師器

7 須恵器



8 須恵器

0 5 10cm

番号	器種	区名	調整 口縁部 内面	口縁部 外面	体部上半 内面	体部上半 外面	体部下半 内面	体部下半 外面	底部 内面	底部 外面	黒色処理	器高cm	口縁部cm	写真番号	備考	分類記号
1	甕	3号住No.4	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕						(9.0)	20.4			C
2	坏	〃 No.2	〃	〃	不明	〃	不明	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	回転糸切	○	5.1	13.3	1		CIa
3	〃	〃 No.1	〃	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	ロクロ痕	〃	〃	○	5.2	13.1	2		CII
5	〃	〃 C-5	〃	〃	〃	〃	〃	手持ヘラケズリ	〃	〃	○	5.2	13.1			CIb
6	〃	〃 B-5		〃	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラケズリ→ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	○	(3.8)		3	底部下面にヘラ書き及び付着	D
7	〃	〃 D-1	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切		4.8	13.3	5		
8	〃	〃 C-4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		5.0	14.6			

			体部 内面	体部 外面	底部											
4	手捏ね土器	3号住床2	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ							1.8	3.0	9		

第8図　3号住居跡出土遺物

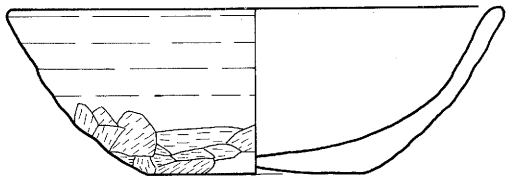
3．遺構の年代

出土土器をもとに遺構の年代を検討すると次のようになる。

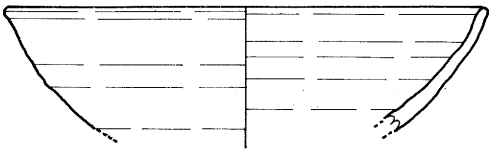
第2住居跡は、年代を推定できる土器の出土が無いため時期は不明である。しかし、住居跡については形態からみて古代に属するものであることは明らかである。

第3住居跡は、ロクロ使用の土器の出土から表杉ノ入式期と考えられる。

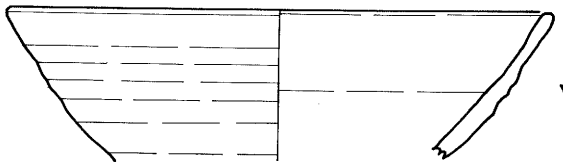
第5住居跡は、今回は精査はしなかったが、出土土器から栗囲式期に属すると考えられる。



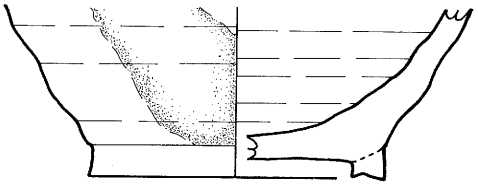
1　土師器



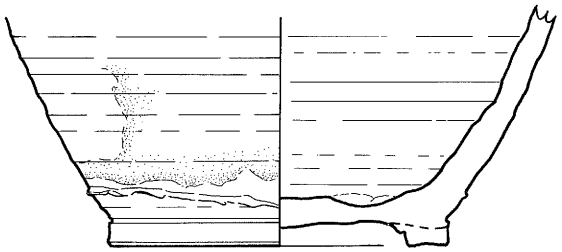
2　須恵器



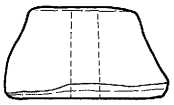
3　須恵器

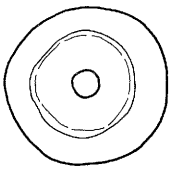


4　灰釉陶器

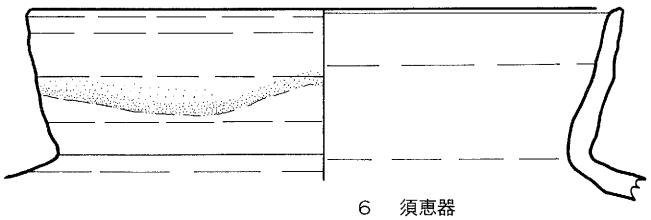


5　灰釉陶器

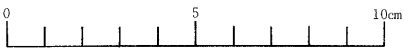




7　紡錘車

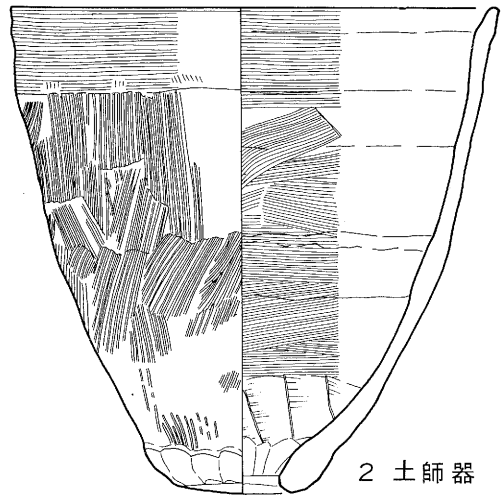


6　須恵器

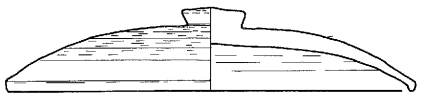


番号	器種	区名	調整 口縁部 内面	調整 口縁部 外面	調整 体部上半 内面	調整 体部上半 外面	調整 体部下半 内面	調整 体部下半 外面	調整 底部 内面	調整 底部 下面	黒色処理	器高	口縁部	写真番号	分類記号
1	坏	3住B－5	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ	○	14.4	13.2		CIb
2	〃	3住A－1	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕				(3.2)	12.8		
3	〃	3住SB内	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕				(4.0)	14.4		
4	高台付壺	3住C－4					ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラケズリ		(4.5)			
5	〃	3住No.6					ロクロ痕	ロクロ痕	指頭によるオサエ	〃		(6.0)		14	
6	甕	3住C西壁－3	ロクロ痕	ロクロ痕								4.8)	15.8		
7	紡錘車	AK76－3	上面径 2.7cm 下面径 4.0cm	器高 2.4cm	穴 上面 0.7cm 下面 0.8cm									6	

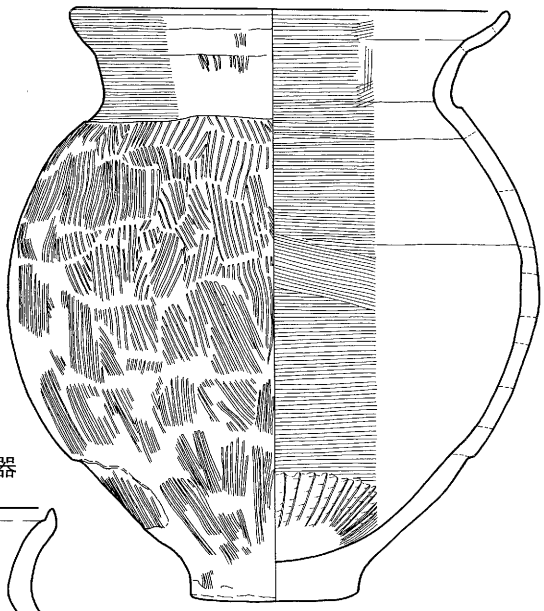
第９図　第３住居跡出土遺物とその他の遺物



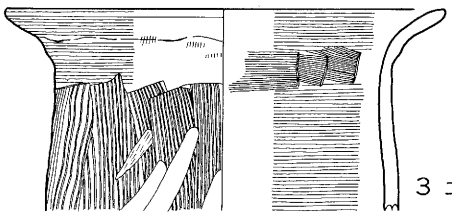
2 土師器



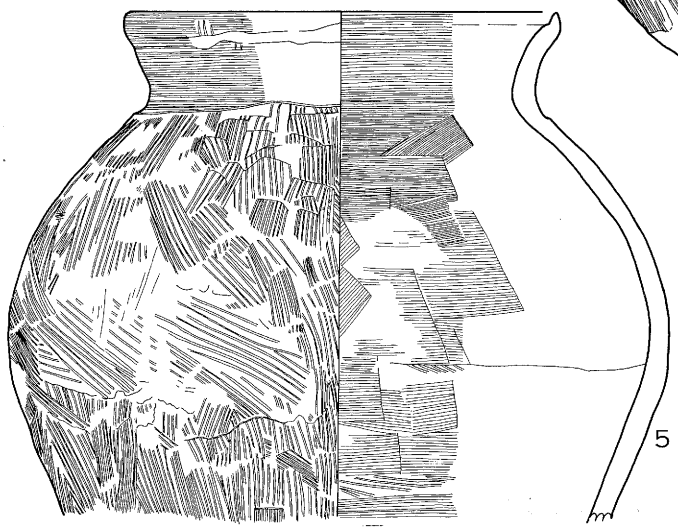
1 須恵器



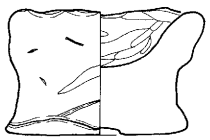
4 土師器



3 土師器



5 土師器



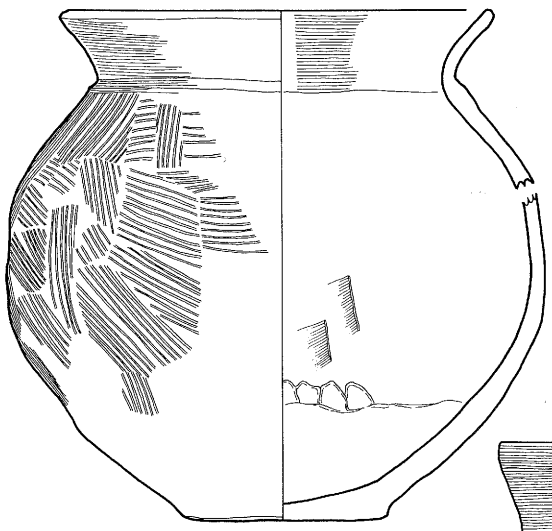
6 土師器

0 5 10cm

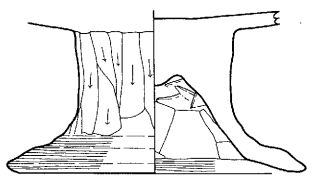
番号	器種	区名	調整 口縁部 内面	口縁部 外面	体部上半 内面	体部上半 外面	体部下半 内面	体部下半 外面	底部 内面	底部 下面	黒色処理	器高cm	口縁部cm	写真番号	分類記号
2	甕	5号住No.1	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ	指頭によるオサエ	指頭によるオサエ		19.4	19.5	17	
3	甕	BQ21−3		ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ						(8.1)	17.6		A_2
4	〃	5号住No.2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ		23.8	17.5	20	B_1
5	〃	〃 No.3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ	ヘラヤデ	ハケメ				(20.1)	17.4	23	B_1
6	手捏ね土器	BT22−3	ヘラミガキ		ヘラミガキ		ヘラミガキ		ヘラミガキ	ヘラケズリ	○	4.9	7.8	12	

			口縁部 内面	口縁部 外面	体部下半 内面	体部下半 外面	体部上半 内面	体部上半 外面	つまみ部					
1	蓋	AK48−2	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラケズリ	ロクロ痕			3.3	16.2	11	

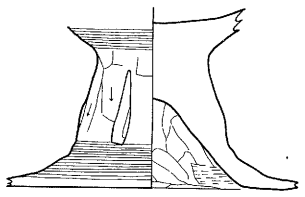
第10図 第5号住居跡出土遺物とその他の遺物



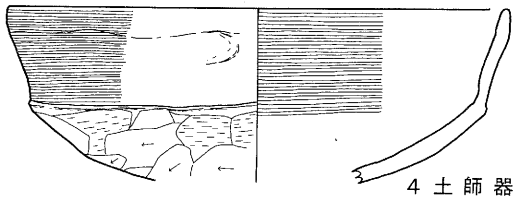
1 土師器



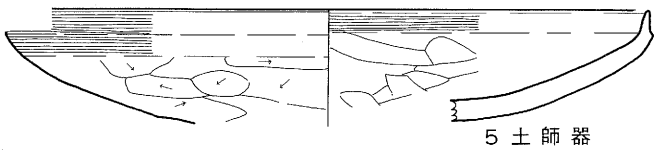
2 土師器



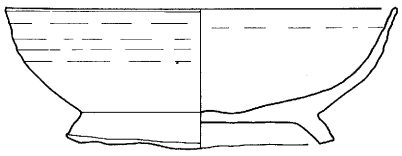
3 土師器



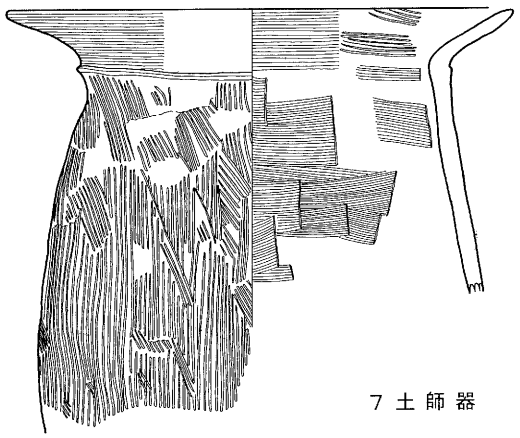
4 土師器



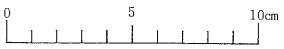
5 土師器



6 須恵器



7 土師器



番号	器種	区名	調整								黒色処理	器高cm	口縁部cm	写真番号	分類記号
			口縁部		体部上半		体部下半		底部						
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	下面					
1	甕	BJ29−3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ハケメ	ヘラタテ→ヨコナデ	ハケメ				20.4	17.4	19	↘B1
4	坏	BQ21−4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ						(6.8)	20.2		B
5	坏	AE76−2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ			○	(4.7)	52.7		A
6	高台付坏	BP20−3	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ヘラ切り		5.6	15.7	10	
7	甕	AE70−2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ		ハケメ				(29.8)	20.3	21	A1
			坏部上半		坏部下半		脚部上半		脚部下半						
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面					
2	高坏	BJ46−3					ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ	○			15	
3	〃	BR21−3			ヘラミガキ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ→ナデ	ヨコナデ	○			18	

第11図　遺構以外の出土遺物

Ⅵ. まとめ

1. 今回の調査は遺構及び範囲確認調査なので、発掘面積は少なかったが、古代の竪穴住居跡30軒が発見された。その他、多量の遺物が発見された。
2. 本調査区中央部ならびに北側にかけて遺構、遺物の集中はみられるものの、ほぼ全域から遺物は出土する。
3. 今回の調査によって古墳時代後期から平安時代以降にかけての遺構と遺物が発見された。
4. 今回の調査は確認調査であるため、本遺跡の一部分が明らかにされたにすぎず、その全体の姿を明らかにするには、後日の詳細な発掘調査を待たなければならない。

図　　版

図版 1　上：遺　跡　遠　景（南東から望む）
下：遺　跡　近　景（北東から望む）

発掘区下刈り状況
（北西から撮影）

BQ・BR・BS－
21区グリッド設定
（西側から撮影）

BQ・BR・BS－
21区粗掘り作業
（西側から撮影）

図版2
発掘作業過程

発掘風景

（南側から撮影）

全　　体

（西側から撮影）

カマド全景

及び貯蔵穴

（西側から撮影）

図版 3

第 2 住居跡

全　　体

（南側から撮影）

カマド全景

（南側から撮影）

断　　面

（北側から撮影）

図版 4

第 3 住居跡

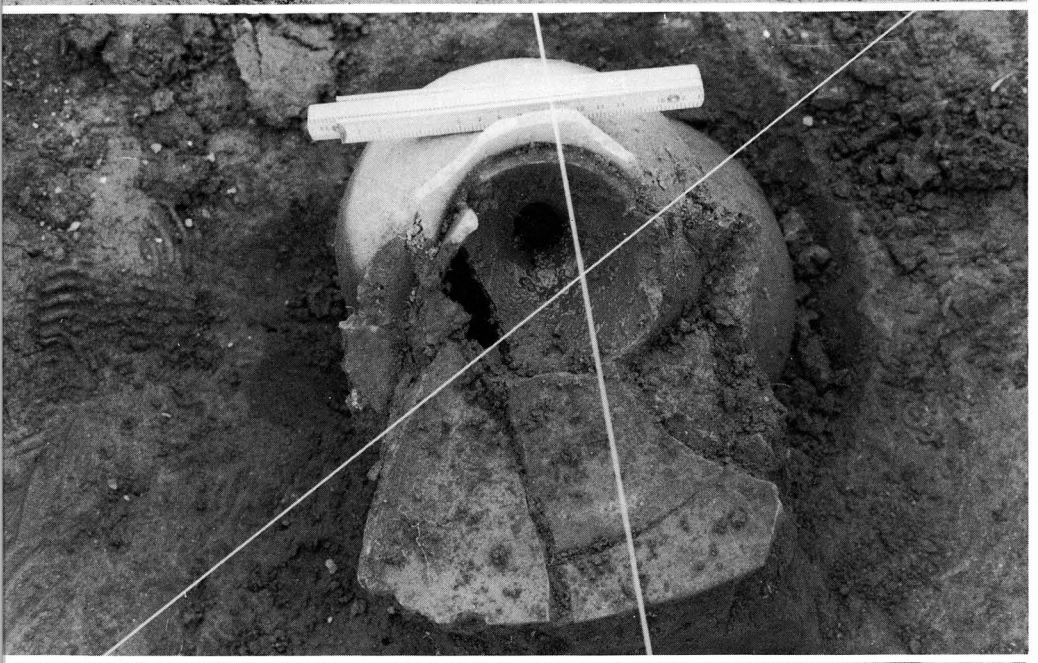
西側から撮影

南側から撮影

北側から撮影

図版 5
第 5 住居跡
遺物出土状況

西側から撮影



上方から撮影

甑取り上げ後
（東側から撮影）

図版 6
第 5 住居跡
出土遺物

ＢＪ29－３層
甕

ＡＧ70－３層
甑

左：ＢＪ22－３層

右：ＡＫ76－３層
紡　錘　車

図版７
遺物出土状況

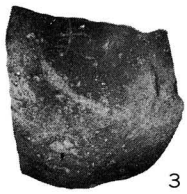
第３住居跡

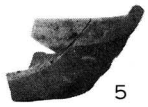
第５住居跡

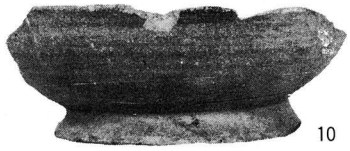
第２住居跡

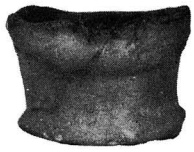
図版８

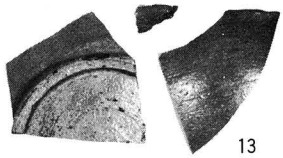
現地説明会風景









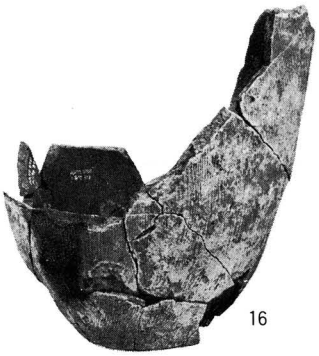


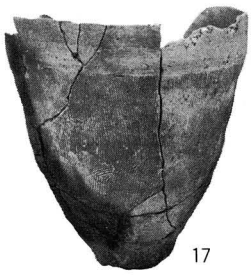
（縮尺不同）

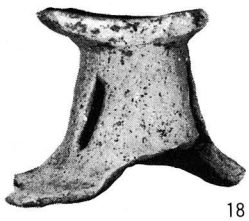
1　土師器坏
2　土師器坏
3　須恵器坏
4　須恵器高台付坏
5　須恵器
6　紡 錘 車
7　須恵器高台付坏
8　須恵器坏
9　土師器手捏ね土器
10　須恵器高台付坏
11　須恵器蓋
12　土師器手捏ね土器
13　緑釉陶器
14　灰釉陶器

図版9　出　土　遺　物　I

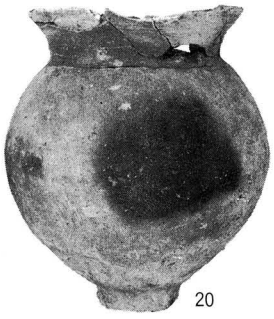
15

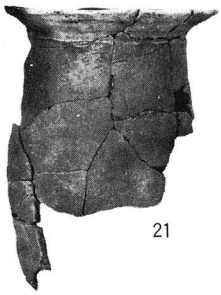

16

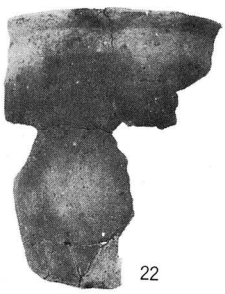

17


18

19


20


21


22

23

(縮尺不同)

15　土師器高坏　　20　土師器甕
16　土師器甑　　21　土師器甕
17　土師器甑　　22　土師器甕
18　土師器高坏　　23　土師器甕
19　土師器甕

図版10　出　土　遺　物　II

白石市文化財調査報告書 第18集

観音崎遺跡調査報告書

昭和53年3月20日　印刷
昭和53年3月31日　発行

発行　白石市教育委員会
宮城県白石市桜小路35　TEL 5－2111
印刷　株式会社 東北プリント
仙台市立町24－24　TEL (25) 6466